

2023年12月10日 説教「アテネでの宣教」

使徒の働き 17章 16～23節

マケドニアのピリピ、テサロニケで宣教したパウロの一行は、ユダヤ人たちと論じ合い、キリストを伝えました。しかし、迫害が身近に近づき、ベレヤへと逃れました。そこのユダヤ人たちは素直で、パウロ達の語ることを確かめるため、日々に聖書を調べていました。そして、信じる人々も起こされました。しかし、テサロニケから来たユダヤ人達の脅かしにより、パウロはアテネに導かれました。

1. アテネの町を巡り (16～18節)

①アテネの町 (16) 「さて、アテネでふたりを待っていたパウロは、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを感じた。」

さて、アテネにやって来たパウロですが、シラスとテモテがやって来るのを待っていました。その間、町を見て回っていました。アテネの町はギリシャの中心地であり、かつてはソクラテスやプラトンやアリストテレスが哲学論議を交わした地です。また、その他のギリシャ文化発展が様々なところに表れていました。芸術的な面からも優れたものがたくさんありました。それらの刻まれた像には当時の人々の信仰が込められていました。しかし、パウロにしてみれば、町中が偶像だらけに思えました。彼の心の中は憤りで一杯だったのです。

②パウロは論じ (17) 「そこでパウロは、会堂ではユダヤ人や神を敬う人たちと論じ、広場では毎日そこに居合わせた人たちと論じた。」

ユダヤ人たちは、アテネの町にも会堂を持っていました。そこにおいて、パウロは旧約聖書を開きながら、イエス・キリストの十字架と復活を論理的に伝えていったことでしょう。また、アゴラと呼ばれる広場においては、ギリシャ人たちと、議論を交わしていました。哲学に通じた人々には、人間の知恵と神の知恵の違いについて語ったことでしょう(1コリ1:21)。

③人々の反応 (18) 「エピクロス派とストア派の哲学者たちも幾人かいて、パウロと論じ合っていたが、その中のある者たちは、『このおしゃべりは、何を言うつもりなのか。』と言い、ほかの者たちは、『彼は外国の神々を伝えているらしい』と言った。パウロがイエスと復活とを宣べ伝えたからである。

エピクロス派の人々は快樂を求め、苦痛や心を乱す情熱、恐怖を免れることを重視しました。彼らにとって神とは、人間の生活に何の興味ももたないと存在でした。一方、ストア派の人々は禁欲主義であり、人間の理性の能力や個人の自己充足性を力説しました。彼らは汎神論をとりました。つまり宇宙あるいは自然は神と一致しているとしました。人格的な神は否定しました。パウロは、こうした哲学者たちと論議しました。すると、彼らは「おしゃべり!」とか「外国の神々を伝えている」とか言いました。というのも、パウロは復活したキリストを伝えたからです。それは、哲学者達に



は考えにも及ばないメッセージでした。

2. アレオパゴスに連れて行かれ (19～21 節)

①新しい教え (19) 「そこで彼らは、パウロをアレオパゴスに連れて行ってこう言った。『あなたの語っているその新しい教えがどんなものであるか、知らせていただけませんか。』」

アレオパゴスはアテネのアクロポリスの北西にあり、高さ 113 メートルの裸の丘でした。初期には政治上、宗教上の事件を取り扱う評議会でしたがローマ時代には、宗教や教育問題などを扱う法廷でした。アレオパゴスは、アテネの最も重要な裁判権を持っていました。パウロはここに連れて行かれて、彼の語っていること、教えを述べるように言われたのです。

②珍しい事を (20) 「『私たちににとっては珍しいことを聞かせてくださるので、それがいったいどんなものか、私たちは知りたいのです。』」

アテネの人々にとっては、パウロの語るところは、珍しい内容だったのです。そこで、それをアレオパゴスで明確に語ってもらおうとしたのです。

③新しいことを求め (21) 「アテネ人も、そこに住む外国人もみな、何か耳新しいことを話したり、聞いたりすることだけで、日を過ごしていた。」

パウロを引き出すほどに、アテネの人々とそこに滞在している外国人たちも、耳新しいことに興味津々であったのです。極端に言えば、そうして過ごすことが、彼らの生活でもあったのです。

3. アテネの人々を前にして (22～23 節)

①アレオパゴス (22) 「そこでパウロは、アレオパゴスの真ん中に立って言った。」

ここ 22 節からはパウロによる、アレオパゴスの説教です。今朝はその冒頭の部分だけを読みます。ともあれ、パウロが立ったのは評議所のど真ん中でありました。

②宗教心にあつい人々 (22) 「『アテネの人たち。あらゆる点から見て、私はあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております。』」

パウロの一声は呼びかけでした。アテネの方々!そして、語る内容は彼らへの誉め言葉でありました。つまり、彼が町を巡り歩いてみて、彼らを表するのに使ったのは宗教心という言葉でした。あなたがたは宗教心に熱い方々だと、私は見えています、という感想でした。

③知られない神に (23) 「『私が道を通りながら、あなたがたの拝むものをよく見ているうちに、『知られない神に』と刻まれた祭壇があるのを見つけました。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、教えましょう。』」

つまり、私がアテネの町の中を歩いて、皆さんが礼拝している像の数々を見てみると、変わっているものがありました。それは「知られない神に」という祭壇でした。そこで、そのことについて皆様にお伝えしますとパウロはイエス・キリストの神について伝えようとしているのです。

《結論》

パウロがアテネ入りしたということは、ギリシャ文明(ヘレニズム)と唯一神を奉ずるヘブライズムとのぶつかり合いが始まったということを意味します。実際のところ、アテネの町を歩き、何メートルおきかに像がパウロの目に飛び込んで来ました。二万体と言われる偶像が満ちていたのです。まさにアテネにはあちらにもこちらにも像があって、それらは拝まれる対象でありました。「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない」「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。」という十戒の第一と第二を心に刻んでいるパウロにとっては耐えられないことだったでしょう。だからこそ、パウロの心の中に生じたのは憤りでした。であれば、アレオパゴスに連れて行かれて、語る第一声は憤りを表すような言葉で始まると思われれます。ところが、彼が放った第一声は「アテネの人たち。あらゆる点から見て、私はあなたがたを宗教心におあつい方々だと見ております。」というものでした。なぜこのような言葉でパウロは語り始めたと思われるのですか。

先週の特別講演会において、木村先生は話しの最後のほうで、キーフさんとの再会のことを伝えられました。少年の頃、片言の英語で話したキーフさんは、木村先生を受け入れてくれました。日本に駐在している軍の中佐であったキーフさんは家にも招いてくれたとのこと。戦後の時期としては、立派な家に何回となく通ったとのこと。そのことが忘れられず、何十年かたった後に、問い合わせでキーフさんとの再会はなったのです。それが、何か軍につながる仕事をしているのかと思っていたところが、なんとカトリックの神父となっていたということです。大転換です。キーフさんが木村先生に語った言葉については、週報の裏ページにもありますが、「旅に出るのに支度をするように、必ず死ぬ存在である私たち人間は、死への旅路の準備をしなくてはなりません。」と言われたそうです。そのキーフさんは、自らの働きについて、「人々を愛する職業」と称したとのことでした。軍の働きを終えたキーフさんは、人を生かす仕事をしたいと思い、学びをした後に神父の道に進んだというわけです。

パウロは偶像に満ちたアテネの町の姿を見て憤りを覚えました。しかし、そこに生きる人々については愛することがまず大切だと、主なる神から教えられたのでしょう。主イエスは、律法の中で大切な戒めを問われた時に、第一に「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、主なる神を愛しなさい」という戒めであり、第二には「あなたの隣人を自分と同じように愛しなさい」(マタイの福音書(22:36-40))であると教えられました。パウロもアテネの民を愛することをまずは示されたからこそ、アテネの人々に敬意を払い、そのの良い点をまずは伝えたのだと思われる。

私たちの宣教や生活においても同じようなことが言えるのではないのでしょうか。感情にまかせて、言葉を伝えたとしたら、相手にもそれは伝わるでしょう。まずは、あなたは語る相手を愛する心をもって臨んでいるかを問い直してみよう。そこに聖霊なる神が働いてくださるのです。